

《100 周年記念討論会》

同志社大学商学部 100 年の教育を見据えて

百合野 正 博 (名誉教授)

森 田 雅 憲 (名誉教授)

上 田 雅 弘 (商学部長)

南 美 樹 (樹徳会理事長)

大 原 悟 務 (司会)

司会 同志社大学商学部の教育について、これまでを顧みるとともに、将来への期待や展望について意見交換したいと考え、この討論会を企画しました。卒業生から樹徳会の南理事長、長年教鞭をとられた先生方から百合野名誉教授と森田名誉教授、現役の教員からは上田商学部長に出席いただきました。まず、皆様と商学部の関わりについてお話しください。

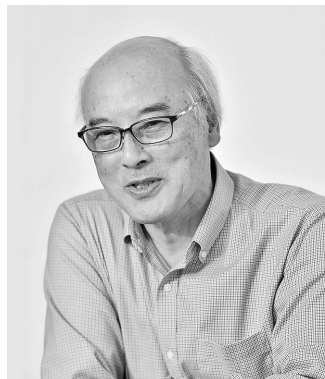


百合野 私は新制同志社大学商学部の発足した 1949 年に生まれ、発足 20 周年の 1969 年に入学し、商学研究科を経て商学部の教員になりました。生まれ育ったのが新町キャンパスの北 300 メートルのところでした、商学部とは浅からぬ縁を感じています。ちょっとオーバーかもしれませんが、生き字引の一人かなと思っています。この年度から必修科目が少なく演習を重視するカリキュラムに変わりました。1 年次前半に学部が割り振った一般演習を履修し、2 年次以降に専門科目担当者による専門演習と教養科目担当

者による教養演習が設置され、希望すれば両方を同時に履修することもできました。演習中心主義と呼ばれていました。当時の商学部の入試科目は数学Ⅰが必須でしたから、国立大学の落ち組も結構いて、2 浪も珍しくなく、一般演習で激しい政治的議論が交わされたのを記憶しています。

学生大会でストライキが繰り返し可決され、ヘルメットにゲバ棒姿の学生が今出川通をフランスデモで埋め尽くす光景も珍しくなくなった頃、同志社大学では全学無期限バリケードストライキに突入して半年にわたり正規の授業が行われなくなりました。しかし、会計研の例会は学館の会議室で行われていましたし、友人たちとの交流も普段どおり。授業を受けなくても大学生としての勉強はできると思っていました。もともと公認

会計士を目指して商学部に入ったのですが、いつの間にか大学教授の道に進んでしまったという、動機不純な学者です。ただ、専門の監査論では、類書のない単著を2冊出版しましたし、登録学生数は多分日本の大学の中ではダントツの1位だと思います。



森田 私は、入社は1980年、退職が2021年で合計41年間、同志社でお世話になりました。担当した科目は「経済学」や「マクロ経済学」などです。同志社大学商学部に採用していただいたこと、本当にありがたく思っています。私は主流派の経済学に批判的な立場で研究していました。経済理論の大前提である「経済人」という割り切った考え方に違和感があったのです。商学部では、会計・経営・流通・金融・経済といろいろな分野の人が自由に研究・教育をしています。経済学部のようにほとんどの科目がミクロ

経済学をベースにしているような組織だった環境では窒息しそうになったと思います。商学部では、自分が知らない研究分野の先生方から様々な知的刺激を受け、同志社の自由な校風のおかげもあって、研究面で経済学を超えて視野を広げることができました。



南 私は1979年に商学部に入りました。同志社高校からの進学でしたので、高校の段階で「どこの学部に行きますか？」と。父が商学部出身でしたので、「他に選択肢はない」と商学部に決めました。私の息子も商学部を出ています。私の時代では、1年生の時に一般演習が半年あって、2年生から専門の演習（ゼミ）がスタートしました。私たちの時は3年間、演習をやりました。2年生から労務管理の島弘先生の演習に所属しました。父が創業した会社がありましたので、将来私が経営していく上で労務管理が必要

だと考えたわけです。あの頃、ゼミの学生は25名くらいというのがスタンダードだったと思います。ゼミでは、島先生の解説や指導のもと、労務管理の文献を読みました。サブゼミもあり、先輩院生が「これを読みましょう」と外国書の文献を選んでくれました。ゼミの合宿は夏と春と年に2回あり、朝から晩まで勉強しました。その代わり夜は先生とお酒を大いに楽しみ、語らい合いました。私たちは先生にたくさんお酒を注いで次の日の勉強を休みにしようとしたくらみましたが、先生はいくら飲んでも翌朝は「おはよう」とケロリとされていました。

そうそう、私たちの時は入学式がありませんでした。テレビのニュースを見ていたら「同志社大学、入学式中止」というテロップが流れ「そうやったんや」と。2年生の冬は全学閉鎖でレポート試験。当時、京田辺校地移転問題で結構、揉めていました。就職は結構、厳しい時代でしたが、総合商社に入りました。海外駐在をした時も「同志社出身の人が多いな」と強く感じました。



上田 商学部長の上田です。1986年度入学になります。京田辺校地に移転した初めての年です。商学部で「実学を学ぼう」と入学したのですが、森田先生の「経済原論」でケインズに触れ、「これだ」と思ってしまったんですね。商学部に入りながらも経済学を志して、その後、実学と理論をつなぐ研究をしています。私が学生の際はゼミが3年生からありました。森田先生のゼミでは「ケインズしかやらないのかな？」という勘違いもありまして、二村重博先生の、もう一つの経済学のゼミに入りました。森田先生に

はサブゼミでも、大学院進学時にもお世話になり、勉強だけではなく、人生観でも強い影響を受けたように思います。大学卒業後、神戸大学大学院に進学し、松山大学に勤め、2007年度に同志社に入社しました。現在の担当科目は「計量経済学」「多変量解析」「産業組織論」です。



司会 先生方の商学部での教育において、印象に残っていることや重きを置いてきたところについて伺います。

百合野 私が入学した頃は、高校までとは全く異なる「大学生になる」(!)という自覚がありました。のちに新入生の必携書となる『間違いだらけの登録相談』なんかありませんでしたから、履修科目は楽勝科目ではなく興味の持てるものを優先しましたし、第2語学も、当時好きだったフランス語を選択し、英書講読と仏書講読は4年次生まで

履修しました。古本屋で安くて難しそうな本を買い込んで自室に並べる、という小細工もしました。

長年商学部の学生と接してきて感じるのは、いつの間にかそのような大学生は絶滅危惧種になりつつあるということです。キャンパスで学んでいるのは高校4年生から7年生のような気がします。授業の最初にアンケートをとると「わかりやすく教えてください」

い」という回答が増え、「専門書が難しいので、プリントを配ってください」と直訴する受講生まで現れるようになりました。商学部の偏差値は昔に比べるとずいぶん高くなりました。しかし、現実には3教科入試の弊害が目立つようになりました。学生が日本史と世界史の両方を学んでいないのです。産業革命を知らない学生に株式会社の成り立ちを説明するのは並大抵ではありません。新聞を読んでこない学生が多数派になると、授業で昨今の政治経済の話をして通じません。この半世紀、大学の大きな変化を目の当たりにしてきました。

司会 学生が変わっていく中で「これは大事にしよう、譲らないでおこう」ということはありましたか？

百合野 ゼミでは横のつながりだけでなく、縦のつながりも大切にしてきました。ひと頃は、縦コンをすると100人以上が大広間でどんちゃん騒ぎをするという状況でした。楽しかったですね。合宿も学生主導で、原書を読んだり、徹夜して議論をしたり、ま、自分の経験した合宿をできるだけ再現しました。1990年代中頃以降は、「函館キャンプ」を実践し、新島襄の偉大さに接する機会を設ける努力をしました。ゼミ生に限らず、「よほど困った時は仕方ないけれど、バイトはできるだけしないように」、「専門書は買って読みなさい」と言ってきましたが、退職前になると「バイトしないと生活できません」、「コンパや合宿どころか、本を買うお金もありません」という学生が現れ始めました。貧困問題は日本社会が直面している重大問題になってしまっていると思います。

司会 森田先生の印象的なことや重視されてきたことは何でしょうか。

森田 文系学部の今出川校地への統合までは京田辺で500人くらいの大きな教室で「経済原論」を講義していました。当時は私語がひどくて、授業では毎回おそらく10回以上、「静かにしなさい」と言わないといけませんでした。ところが、退職する前の数年間は、私語はほぼなくなった。また、昔は私語もひどかったが、授業が終わると毎回数名の学生が質問に来てくれ、休み時間が潰れることもありました。一方、近年の授業では教室はシーンとしているが、大人しいのか質問にもあまり来なくなったように感じていました。もう一つ印象に残っていることは、入試から数学がなくなって、学生の質が変わったように感じたことです。以前は、商学部の入試では数学が必須でしたが、1980年代終わりに廃止された。数学を必須から外したことで、確かに英語の力は上がったと思います。ただ以前は私学専願に加え、国立大学と併願している受験生もそれなりにい

たので、学生にも多様性がありました。数学をなくしてからは学生が均質化したように思います。多様性を取り戻すためにも個人的には数学を復活させてほしいと思っています。また、将来的に数学を使う・使わないにかかわらず、論理性を徹底的に鍛えてくれる数学は、ほとんどの分野でもかなり役立つと思います。

余談ですが、昔は答案を読むと採点が楽しくなるようなものが散見されました。試験の設問に答えず、授業批判を延々と書いているものとか、答案一面に箸の絵が描いてあって「何の意味かな？」と思ったら「放棄」だった（笑い）というものとか、得意料理のレシピを書いたものなど、それぞれ個儻不羈な答案が結構ありました。答案の末尾に授業の感想を自発的に書いてくれる学生も結構いて、授業を改善する上で大いに参考になりました。今は、設問内容に関係したことしか書いていない真面目な答案ばかりです。学生との接点がなくなったようで、少し寂しい気持ちになります。もちろん、設問に答えるというのが基本で、それを飛ばして料理のレシピだけが書いてあっても評価の対象とはしません。

ゼミについて言いますと、演習を担当するようになった当初は、学生の発表に対し私がコメントすると「先生、その指摘は間違っていますよ」とゼミ生から逆に反論されることがあって、刺激的でした。私自身がだんだん歳をとって学生との年齢差が大きくなったことも一因ではないかと思いますが、近年では、学生からの反論はまったくなく、私のコメントを素直に受け入れてくれますし、コメントが厳しいと学生が落ち込んだりしますので、それなりに気を使います。往復授業ができることがメリットのゼミが一方通行になったような気がしていました。

ともあれ、今も昔も、同志社には潜在的可能性の大きな学生が多いなと感じることは変わりません。成績がとても良いとか、知的好奇心に溢れているわけでもない学生であっても、火が付いたら驚くほど頑張る学生が多いような気がします。私のゼミでは皆が皆、勉学へのモチベーションが高いというわけではありませんでした。それでも優良企業に普通に就職していきますし、中には海外支社長になって大活躍している卒業生もいます。大学の教壇に立っている卒業生もいますし、会計のゼミでもないのに公認会計士になった者も数名います。潜在能力の高さを示す具体例をあげたいと思います。かつて、指定校推薦で入学してきた学生で、経済学の大学院に進学を希望するゼミ生がいました。「院試ではミクロ・マクロは必須だし、そのためには数学も必要だ」というと、自力でそうした分野をマスターし、難関で知られている某国立大学の経済学研究科にストレートで進学しました。いま彼は、とある私立大学で准教授として教育・研究に携わっています。私自身がもっと頑張っていれば、素質のある学生をもっと発掘できたかなという反省もあります。

もう一つ思い出に残っているのは学生と、よく飲みに行ったことです。ある学年のゼ

ミ生など、私が授業も終わり帰宅すべく至誠館を出ると、そこに数名のゼミ生が待ち構えていて、拉致されるように飲み連れにいかれたことがありました。そういう学年の卒業生とは今でも時々会って飲み会をします。学問以外のことで学生に影響を与えられたとしたら、それはお酒の席で話をしたことくらいかなと思います。

司会 上田先生はいかがでしょう。

上田 私自身、商学部出身ですから商学部生の気質はよく理解していたつもりです。私の頃も自分の思ったことを言うとか主体性が学生に強く残っていた時代でした。そこから松山大学に行き、2007年に同志社大学に帰ってきた時、学生の主体性の強さをすっかり忘れていました。結構、私の言うことを聞いてくれるかなと思ったら、そうではなく学生が反発してくる。「そうだ同志社は、こうだった」と思い出しました。ところが、近年では主体性というよりも協調性を意識する学生が増えてきたように思います。

「どういうことを旨として教育しているか」というと、「力」の言葉と「心」の言葉を意識しています。力の言葉は「何々力」というもので、忍耐力、表現力、包容力のほか、専門に絡めて「抽象的に見る力」も重視しています。それから「実証的に確認する力」「データを分析する力」「戦略的に実践する力」も大事にしています。

「心の言葉」としては、まずは好奇心を大事にしてほしいと思っています。また、感受性のある心を持ってほしいですね。大学で人や物事の多様性を受け入れ、充実感を得てほしい。力の言葉と心の言葉を意識して生活するといいいよと学生には伝えています。

ただ最近を感じるのですが、自分が「これをやりたい」というよりも、変に周りを意識してまともろうとする。「これでいいのかな？」と気になる半面、「こういう時代なんだな」とも思います。

司会 次に同志社大学商学部の出発点である同志社高等商業学校を振り返ってみます。何かエピソードをご紹介ください。

南 父が高商で学校が岩倉でした。近くに出石先生がお住まいで、通学路で一緒になったことも何度かあったようです。質実剛健の校風だとか、学園祭や体育祭が盛んであったことも聞いています。応援団の団長だった父の写真も記憶に残っています。高商の方々は自分たちで成し遂げる力が強かったと聞いています。これが原動力になり、資金も集め、岩倉に高商ができました。樹徳会も自主自立の気風があり、今も受け継がれています。

百合野 高商と商学部の卒業生の会である樹徳会の総会はいつも賑やかでした。高商の先輩は、みなさん声が大きく、お元気で、人生を楽しんでおられる方が多かったように思います。特に印象に残っているのは、北海道の藤井清さんという白い髭の先輩です。樹徳会の札幌支部でお目にかかった際に、「病床の新島八重さんと握手をした」とおっしゃるので、びっくりしました。新島八重さんから「頑張りなさいね」と言われたそうです。思わず、藤井さんに握手を求めてしまいました。八重さんと「間接握手」ですね。

それから、高商の学生は他人の意見や考えに軽々しく同調しない同志社の中で一番新島精神に溢れた学校だったと聞いたことがあります。オール同志社の運動会で「前にならえ」と号令がかかると高商生は一斉に後ろを向いたとか。多分、平山玄先生の昔話だったと思います。平山先生は1942年から経済原論の教授だったそうですが、私が講義の内容で覚えているのは「生協のうどんを食べたら一杯目はうまいけれど、二杯目はそれほどでもなく、三杯目は・・・」と限界効用逓減の法則を説明されたことくらいですね。先生の書かれた『同志社高商・商学部物語』（葵産業経済研究所、1978年）を読むと、商学部発足時には高商時代からの先生とほかの学部や大学から移って来られた先生のおられたことがわかります。私が助手に採用された頃でも発足時の先生方が現職でおられましたので、宴席は言うまでもなく、麻雀や魚釣りに興じながらバラエティに富んだ面白いお話を伺うことができました。長老の先生方と気楽に接することができたのは駆け出しの商学部教員にとって実に幸せなことだったと思います。

森田 私が教員として商学部に入った頃には高商で学んだ先生方が、何人かおられました。どの先生も、おおらかだった気がしますね。かつては、樹徳会でも高商出身の方がかなりおられて、よく思い出話を聞きました。熱い思いが詰まった学校だったのだなと感じました。

南 私の自宅には新島襄先生の写真と父親の卒業証書が額に入れられていて、それを見ながら子供の頃から見ています。島先生がアメリカに在外研究に行かれた時には、卒業生のメンバーが集まって、島先生の奥様と天ヶ瀬ダムに行ったりして、もうファミリーですよ。先輩方や父親を見ても、卒業生の上下や横のつながりが強い。そういう感じがしますね。これを受け継いで私の子どもも30年後に入学しました。こういうつながりのよさも高商や商学部の特徴ではないでしょうか。

司会 森田先生の出身である神戸大学も元は高等商業学校です。共通点を感じるところはありますか。

森田 神戸大学には「凌霜会」という同窓会があり、とても団結力があります。ただ、同志社高商の方々には野武士のようなパワーや勢いを強く感じます。

百合野 神戸大学といえば、同大学の名誉教授の久保田音二郎先生には大学院で鍛えていただきました。同じく神戸商科大学の名誉教授だった阪本安一先生にも鍛えていただきました。いずれもマンツーマンの指導で、毎週山ほど宿題を出されたので苦労しましたが、どんな質問にも明快に答えてくださいました。大学教授たるものはこうでなければならぬのだと、先の人生の厳しさを予見させられました。

私の指導教授だった西村民之助先生も高商で教鞭をとっておられたとのことですが、商学部では、国際的に著名な会計学者である井尻雄士先生を育てられています。井尻先生の著書には会計学の西村ゼミでカーライルの『衣装哲学』を読んだことが書かれていますが、私も、実は西村先生から会計学以外の自然の摂理についての話を聞くことが多かったように記憶しています。

専門以外のこと、といえば、商学部所属のスペイン語の大島正先生も紹介してください。私は一般教養科目「文学 G」を履修したのですが、実は、サラリーマン税金訴訟で有名な先生でした。裁判では負けることになるのですが、「サラリーマンにも必要経費を認めろ」という訴訟のおかげで給与所得控除が大きくなりました。我々サラリーマンの恩人です。しかし、授業で訴訟の話は一切されませんでした。教員になって初めて知ったのですが、先生は「人に役に立つことを研究して社会に還元しない会計学者は、みなアホや」とおっしゃっていました。大島正先生が商学部におられたことも記録に残してほしいと思います。

司会 今はオンライン授業が当たり前になり、場所を問わず学べるようになりました。あらためて京都にある大学で学ぶ意義について伺います。

森田 海外の大学で教壇に立っていたある有名な日本人経済学者が、ある講演の中で「日本の中で最も国際的に通用するのは京都だ」と言っていました。京都には文化人がたくさんいて世界中から観光客が訪れる国際都市という意味ではなく、「仲がいい人とだけ交わるのではなく、仲が悪い人とも適度な距離感を持ちながら付き合う文化が京都にはある」と言う意味だったと記憶しています。社会性ではなく社交性があるのですね。1000年に渡って京都は政争の中心にあったわけですが、その中で自分の主張をはっきり出してしまうと命を失うことにもなりかねない。自分の主張はほどほどにしておき、相手の主張に耳を傾けながら距離感を探る、とても言うのでしょうか。それが京都人のわかりにくさにつながっているかもしれませんが、敵か味方かわからない人とも一

定の距離感を持って付き合える。そのような振る舞い方が、いわゆる「京都人」にはあるのではないのでしょうか。こういう文化は京都に住んでみないとわからない。大学4年間を通じて京都で暮らしている人たちに直に触れ、彼らの身の処し方を吸収していくことは、同志社で学ぶメリットの一つだと思います。

私の数少ない海外経験からも社交性は大切だと思います。私はアメリカの東海岸で留学生活を送っていました。その間、毎週末のようにパーティに招かれました。友人達だけの場合は別として、どのようなパーティでも、社交性が求められているように感じました。参加した人たちを見ていると、特定の人とだけ会話するのではなく、誰とでも適当な話題を見つけてにこやかに話していました。＜親しい・親しくない＞、＜自分にとって得だから・得でないから＞ではなく、適当な距離をおいて誰とでもコミュニケーションすることは、国際的なビジネスシーンでも必要だと思います。京都にはこのような人付き合いのノウハウがあるのではないかと思います。同志社は京都の伝統が息づくところに位置しています。京都に来て、世界ではデファクト・スタンダードと言って良い社交性を備えた人になることを意識して大学生活を送る。ここに京都でビジネスを学ぶことの一つの意義があるのではないかと思います。

上田 京都で学ぶことができる。これはまさに同志社らしさの1つになります。先生方が感じておられる「同志社らしさ」や「商学部らしさ」についてお聞かせください。

百合野 私の都市伝説をご存知でしょうか？日経新聞にも載りました。監査論の期末試験の問題の最後に「カレッジソングを歌える人は、その証拠を示しなさい」と書き加えていました。「単位をあげます」とは書いていないのですが、大勢の学生が答案用紙の裏にカレッジソングの歌詞を書きました。研究室まで歌いにきた学生もいました。やがて非常勤講師をしていた大阪の大学の学生までもが同志社のカレッジソングを答案用紙の裏に書くようになりました。商学部の新入生歓迎会でも、サンドウィッチを食べる前にカレッジソングが歌えるように歌唱指導をしていました。配られた記念品もかわいい新島グッズでした。同志社人としての自覚を育てる第一歩だと信じています。

しかし、私自身、学生時代から新島襄に傾倒してきたわけではありません。若王子にお墓参りに行ったり、函館キャンプに同行したりする中で、新島襄のユニークさに気がきました。我々教員がそれを学生に伝えずして同志社の教育はないだろうと思い、講義の中にも織り込むように工夫しました。最終的には、監査論の研究にも新島の考え方を反映させて、論文や単著の軸にしました。

森田 大学院生の頃、私は同志社のような有名大学に就職できるとはまったく思ってい

ませんでした。大学院を終える頃、ゼミの指導教官から「森田くん、君、同志社に行けばどうか」と言われた時、まったく心の準備ができていなかったのも、大きなプレッシャーを感じました。そういう経緯で同志社に就職しましたので、校風や教育理念はもちろん、創立者である新島襄のことでさえほとんど知りませんでした。もちろん、アーモスト大学が、どんな大学かも知りませんでした。

初めての在外研究のチャンスがめぐってきたとき、私の研究テーマと近い研究者のいるケンブリッジ大学に行きたかったのですが、イギリスの国費留学の最終選考で落ちてしまい、果たしてどこに留学すべきか分からず茫然としていました。そのとき、二村重博先生から、「アーモスト大学への在外研究制度がある。それに応募してはどうか」とアドヴァイスを受け、オーティス・ケーリ先生を紹介していただき、先生のご尽力でアーモスト大学への派遣が決まりました。アーモストに着いて、彼の地では新島襄がとても高く評価されていることを知り、おそまきながら同志社の歴史をいろいろ学び、同志社ほどドラマチックな創立のストーリーを持った大学は稀有であると思いました。同志社の原点とも言えるアーモスト大学と同志社との交流は今日に至るまで脈々と受け継がれていますが、常々、両校の交流をもっと多くの人に経験してもらいたいと思っています。そのようなわけで、私が同志社小学校の設立に携わっていたときも、児童の修学旅行先はアーモスト大学と決めていました。アーモスト大学にとっては外国の小学生を90名も引き受けるというのは異例のことでしたが、新島襄の縁で特別に受け入れていただきました。90名の児童がはじめてアーモスト大学を訪れたとき、ジョンソン・チャペルでの歓迎式典で、当時のトニー・マークス学長が新島襄の話をしてくれました。その中で「新島が日本に持ち帰った成果よりもっと大切なものは、彼がアメリカに残していったものです。アーモスト大学は新島を変えました。しかし彼もまたアーモストを永遠に良い方向に変えたのです」と話したことは、児童たちに深い感動を与えたに違いないと思っています。これほどの熱い思いと強い意志をもって創立された大学は、おそらく同志社以外ではなかなかないのではないのでしょうか。国策や実業界の要望を受けてつくったのではなく、新島の中に西欧文明に対する憧憬があったとはいえ、「人間として、いかに生きるか」という純粋な問いかけに導かれて大学創立までたどりついたというのはこの上なく素晴らしい。それが良心教育として今に続いている。これこそが同志社のリベラルアーツ教育の原点ではないのでしょうか。

南 同志社の人たちは困ったことがあっても何とかしてくれるという雰囲気をもっていますね。無理を頼んでも何とかしてくれる。総合商社に勤めていた時に北京に駐在しました。30年以上も前のことですが、北京にも「同志社会」がありました。当時は生活環境が整っていませんでした。田舎であれば、なおのことなのですが、そこでも同志社

出身の人に会い、助けてもらいました。僻地でも開拓して、自由に楽しくやっている。学力もあって胆力もあって、海外でも広く渡り合っていますね。

私は学生時代のサマープログラムで海外に触れました。このプログラムができて間もない頃でした。各学部から 30 人くらいの学生が参加していました。アモストの寮で 4 週間生活し、週末には、ホストファミリーが決まって、そこでお世話になりました。ニューヨーク、ボストン、さらに西海岸のサンフランシスコも訪れて帰ってくる 40 日間でした。行く先々でカルチャーショックを受けました。ニューヨークとボストンは雰囲気まったく違っていました。引率してくれた先生との絆もできました。先生と一緒にフェアウェルパーティを企画しました。教師と学生の関係ではなく「同志」というか、みんなでパーティをやろうというのは、うれしかったです。

このプログラムには多種多様な学生が参加していました。工学部で新聞記者になった人もいました。このような機会を同志社は与えてくれて、ありがたいなと思いました。私の息子も大学の紹介によりオーストラリアと韓国でそれぞれ 1 カ月くらい学びました。国際的な経験が得られる機会が同志社には多いと思います。その結果、たくましい学生が育つのではないかというイメージがあります。それが「同志社らしさ」ではないかなと思います。

上田 同志社が大事にしている「自由」というものをどうお考えになりますか？

百合野 私たちが学生の頃は、京大や立命館の講義を聴きに行くのは普通のことでした。単位にならなくても良い講義は聞きに行く、京都全体が一つの大学のキャンパスのような感じでした。それがいつの間にか同じ大学ですら個別のキャンパスから出ないようになってしまったように思います。大学生としてできることはいっぱいある。それを見つけて自由に動き回るのが大学生であると早く気づいてほしいと思っています。

森田 同志社で、なぜ「自由」が尊重されるか。国禁を犯して命懸けで脱国するというのは、外部からの制約ではなく内なる規律にしたがって生きるという点で、まさに精神の自由そのものであると思うのですね。もう一つ新島は懇請されたにも関わらず官僚にならなかった。官僚にならず、既成の権威や制度に縛られない生き方を選択した。そういう新島自身の生き様が、同志社で今も「自由」が尊重されるルーツかなと思っています。

南 学生の自治が、すごくしっかりしていました。今、寒梅館があるところに学生会館があり、学生が管理していました。ただ、責任を持ってやらないといけません。自由を

求める権利だけでなく、責任も果たしてやらないといかん。他人の自由も守らないといかん。自由だけ求めるものではないこともわかっていました。先の京都らしさのご発言と重なりますが、相手の自由を尊重して、こちらの自由も尊重してもらうという距離感が大切です。私は所属した書道部を通してこういう感覚を得ました。

司会 「ウイズコロナ」から「ポストコロナ」, 「アフターコロナ」へとようやく先が見えてきました。この変わり目に教育について思うことは何でしょうか。

百合野 コロナ禍を振り返って思うことは、「授業が受けられない」という大学生の悲鳴ばかりに焦点が当てられたことです。本を読めば自ら学ぶこともできるのに、授業を受けることが何よりも大事だという雰囲気が広がってしまったのは残念です。大学というところはさまざまな学びの機会のある時空だということを訴えることはできなかったのでしょうか。また、課外活動も大きく制限されましたが、正課と正課外が一体化しているのが大学であり、大学生はそこで人間的に成長できると思っています。できるだけ早く以前のようなキャンパスに戻していくべきだと思っています。

森田 今回のコロナ禍によって、皮肉にも世界中とネットワークを使ってビジネスや教育ができることが実証されました。これは後戻りできない変化ですね。また一方で多様性を重視する世界の流れも避けて通れない。在宅勤務もあるし、現場での勤務もある。国境を超えた雇用、例えば、アメリカで在宅しながら日本企業で働くのも可能な時代になってきている。現に IT 業界では、そういう就業形態も実践されている。この働き方の多様化という流れは必ず大学にも来ると思います。基本的には、百合野先生がおっしゃるように、キャンパスに集って人間関係を学んでいく。それは本来のあるべき姿だと思うのですが、学生の方から「バーチャルでもできるでしょう、なぜ選択肢として与えてくれないのですか？」という要望が必ず出てくるし、また既に出てきている。早晩、教員からも出てくると思います。「なぜバーチャルだけで教えたらいけないのか」と考える人たちも一部出てくると思います。こうした「選択肢が広がるならいいじゃないか」という声に対して大学としてどのように対応するかが問われているのではないのでしょうか。結論的には、既にそうであるように両立してやるしかないと思います。立ち講義を直接受けたい学生は教室に行き、自宅や下宿で学びたいという学生にはリモートで授業する形になる。また、バーチャルな授業のみを担当する教員や外国に住んでいる教員を雇うようになるかもしれません。こういう時代が、すぐそこにきているなという気がします。

しかしそれでも、キャンパスに集って授業を受けるという文化は残り、キャンパスか

ら学生が消えるという状況は永遠に来ないでしょう。何と言っても、人間はイン・パーソンでコミュニケーションしないといけない。いくらリモートで画面越しにやれたとしても、言葉や映像を超えたところで伝わってくる息づかいとか画面に映らない些細な仕草からの情報がないと、もどかしい部分が残る。ですので、SNS での炎上問題などを例にとって、こうした形でのコミュニケーションの質の劣化を問題視する人も多くいますね。やはり大学で学ぶ大きな目的の一つが人間形成にあるかぎり、これからも学生はキャンパスに集まってくると思います。ただ、学びの多様性を保証するために、選択の可能性は広げておかないと、時代に取り残されるような気がします。そのような社会の中で、人と人との交わりを基本とするリベラルアーツ教育の精神をどう担保していくかが、これからの同志社の大きな課題ではないかと思っています。

百合野 おっしゃるように、戦略としてはいろんな方策があると思います。しかし、リアルが主で、リモートは従だという思いが強いですね。キャンパスで過ごすことこそが大学生にとって大事なことだと思っています。この討論会もリアルだから話が弾んでいるのではないのでしょうか。バーチャルでも、Google をつけたら教室の様子が見えるかもしれませんが、実際に見えているものとは異なるものだと思います。

南 確かにバーチャルではできないことがあります。私の学生時代の英語クラスではディケンズばかりやっていた。宿題を個別に出してくれて、ちゃんと添削もしてくれて「こういう時にはこうするんだよ」と面と向かって教えてくれた。「打てば響く」ところがあってよかったと思っています。今の学生にもそういうチャンスをつかんでほしい。

上田 先生方がおっしゃったオンラインを入れる話は、既にある程度実現しています。新型コロナの感染対策で教室では受講者が間を空けて座ります。教室に受講者が入りきれない場合はオンラインで授業を行っています。受講者のローテーションを組んで、2 週に一回来てもらう形で教室での授業とオンラインの授業を併用しているものもあります。一方、対話のあるゼミとか語学とかは教室で行っています。このような機能の分化が、これからどんどん進んでいくんじゃないかと思っています。

今後、競争力のある大学になるためには思い切った策も必要だと感じていますね。「ソサエティ 5.0」の時代とも言われています。私がソサエティ 5.0 の形容として思うのは「つながり」の大切さです。卒業生とのつながり、学生同士の縦横のつながり、社会とのつながりと、つまり「連携の社会」という意味になります。単なるバーチャルな世界ではなく、バーチャルな世界と現実の世界とのつながり、そこを考えていかないといけない時代になっていくと認識しています。

司会 最後に100歳を迎える商学部に期待することについてお聞きます。

百合野 京都には100年企業がザラにあるので100歳を迎えるといっても自慢になりませんね。でも、期待する、しないは別にして、今の商学部は私が教員になった頃とは全く異質の組織になってしまったと感じます。それが悪いことだとは言っていない。ただ、新島が同志社を設立した強い思いは受け継いでほしいと願っています。その意味では、教員の側が同志社の建学の精神や教育の理念について研修することも必要ではないでしょうか。昔、斉藤尚久教授が学部長をされていたときですが、新任教員に対する商学部独自のオリエンテーションが行われていました。同志社大学のこと、新島襄のこと、そして商学部のことについて斉藤先生ご自身が熱く語られました。他大学から来られた先生方にはとくに大きな刺激になったのではないかと思います。新任教員がそろって校祖墓参をするというのもいいんじゃないかと思っています。

森田 社会システムが不可避免的に大きく変化していることは間違いないと思います。教育もそれに応じて変えていかないといけないのですが、同志社の3つの教育理念、「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」は守ってほしい。「キリスト教主義」を博愛精神のように受け止め敷居が高いと感じる人は、「利己主義の相対化」というか「自己利益の追求もほどほどにしておけよ」という戒めだと受け止めれば良いのではないか。「自由主義」は「自治・自立主義」とも言われるとおり、自己規律・自己決定の重視であり、今もそうですがこれからも必要な徳目でしょう。「国際主義」については、今日、偏狭なナショナリズムが世界中で頭をもたげていますけれど、そうしたものを超えて価値観の多様性を尊重しつつ広く社交できる力を育てることが、ここでいう国際主義の意味ではないかなと考えています。

現代でも通用する3つの教育理念に基づいて、リベラルアーツ教育を今後も実践していくことを同志社大学やこの商学部期待しています。リベラルアーツ教育で身につけたものは一生ものになります。常に陳腐化しがちなテクニカルな知識だけを教える大学になってはいけません。「人間とは何か、社会とは何か、世界とは何か」について、自分なりの考えを持てるような人間を目指すべきではないかと思っています。今回のコロナ禍にしても、ロシアのウクライナ侵攻にしても、誰も起こると思っていなかったことが普通に起こっている。想像を絶する規模の自然災害もそうです。想定外のことが日常的に起こる激動の時代がこれからも続くでしょう。そのなかで生きていくのに必要な力とは何か。それは変化への対応力ではないでしょうか。そしてリベラルアーツ教育こそがそうした力を培うのだと思います。

南 私は就職の時に「人生について考えたことがあるか？」と問われたことがありました。同志社大学ではその答えは教えてくれませんが、ヒントはたくさん与えてくれます。自分たちで答えを見つけるよう促してくれます。今後もこうあり続けてほしいです。また、卒業して帰ってきた時、ホッとできる場であってほしい。そのために、私たち樹徳会はしっかりと地に足をつけた活動をして、役に立つ存在になる必要があると思っています。

上田 変わらぬこと、変えてはいけないことは脈々と続きます。この 100 年間で商学部が変わらなかったことは何か。「教えられる」より「学ぶ」こと、そういう姿勢が、同志社の商学部の理念の中にあると思います。また、変わらなくてはならないこと、変わるべきもの、時代の流れにあわせてついていかなければならない技術もあります。「なぜ京都で、なぜ同志社で、なぜ商学部なのか」を伝えていく大切さをこの討論会で強く感じました。

大原 皆様のお力により充実した討論会を開催できました。ありがとうございました。

